**老舗・紀伊國屋書店新宿本店がプロレスイベントを仕掛けるワケ**

　日本の書店を代表する老舗・紀伊國屋書店新宿本店（東京都新宿区）。専門書や人文書も丁寧に扱うこの老舗書店を会場に、プロレス関連のイベントが最近、なぜか盛り上がっている。仕掛け人の今井さんは、どこからどう見ても「文化系女子」。ふだんは文芸書を担当しているというのだから、日本を代表するカリスマ書店員と言っても過言ではない。そんな今井さんとプロレスとの間の距離は一見遠いように見えるが、「プロレスは小説と似ているんです！」と主張する彼女の目を通すからこそ、なぜ今プロレス人気が復活したのかが見えてくるかもしれない。今井さんが自ら手がけたイベントのリポートや本の書評を織り交ぜながら、なぜ今プロレスがブームになっているのか深読みしてもらった。

## 夢のマッチアップ！？　男色ディーノｖｓ．三田佐代子

まるでプロレスの試合のようだった。一人が言葉を発すれば、もう一人はそれをすかさず受け、存分に話を引き出してからさらにスイングさせる。息つく暇もない話術の応酬に、観客はき、笑う。二人の化学反応が生みだす渦にみ込まれるように、あっという間に１時間半が過ぎた。

　さる５月２５日に弊店で開催された『プロレスという生き方』（中公新書ラクレ）の刊行記念トークショー「あなたの心に男色ナイトメア！プロレスはなぜまた面白くなったのか」。本書の著者で、プロレス専門のＣＳチャンネルのキャスター・三田佐代子さんと、ＤＤＴプロレスリング所属のレスラー・男色ディーノ選手にご登壇いただいた（ちなみにトークショーのタイトルにある「男色ナイトメア」とはディーノ選手の技の名前である。どんな技かはここではとても書けないので、各自お調べいただきたい）。

　三田さんのコールで、コスチュームの上に書店のエプロンをまとったディーノ選手が入場。プロレス興行さながら男性客にリップロック（これもまた説明するのがられる技）を決め、会場は一気に盛り上がる。三田さんとディーノ選手、ライブ版「活字プロレス」のゴングが鳴った。

　実は、ディーノ選手はゲーム批評もこなす文才の持ち主。執筆という行為について話が及ぶと「自分に酔わずに人に伝えることなんてできない。自分の意見を他人に伝えるなんてそもそもおこがましくて、自分に酔わない状態でできるわけない」と持論を展開した。また、「自分を含む１９７７年生まれのレスラーが多いのは、超人的な主人公たちが活躍する『少年ジャンプ』の影響を受けたからだ」とディーノ選手が世代論を語れば、三田さんは新日本プロレスの永田裕志選手の言葉をひいて「第三世代」の悲哀を語る。

　プロレスについて語ることは、なんて楽しいのだろう！

## 書店がプロレスのイベントを仕掛ける理由

　ふだん私は文芸書を担当している。好きが高じて、プロレスのイベントを企画するようになった。弊店には、人が集まりそうな面白いことはとにかくやってみろという風土があり、文芸書の人間が畑違いのイベントをやりたいと言ったときも、何の逆風もなかった。でも、書店の幹部を本当の意味で納得させたのは、イベントに来て下さったプロレスファンの熱意であり、レスラーの魅力だろう。

　整理券は即日完売。サイン会や撮影会でレスラーとファンが言葉を交わす。そんな光景を見れば、こういう場を作れてよかったと書店人冥利に尽きる。イベントを何回も開催するうちにプロレス熱が店全体に広がっているようで、最近ではプロレス関連本を多めに入荷していたり、いつのまにかいい場所で展開されていたり、なんてこともある。

　今回のようなプロレスのトークイベントは初の試みだったが、会場の外で聞いていた上司が「まれにみる盛り上がりだったね」と驚いていた。本をおすすめするように、プロレスの楽しさとレスラーの肉体が持つオーラを、身近な書店の店頭でお伝えできればと思っている。

　４年前まで、プロレスのプの字も興味がなかった私。プロレスへの扉を開けてくれたのは、西加奈子さんの小説『ふくわらい』（朝日新聞出版）だった。顔面が崩壊したロートルレスラーが登場するこの作品について、知り合いの書店員と話していたところ「じゃあ、生でプロレス見ときましょう」と誘われた。この書店員というのが、「書店プロレス」を開催したこともある伊野尾書店（新宿区上落合）の店主・伊野尾宏之さんだった。

　初観戦は２０１２年１０月、新日本プロレスの両国大会。伊野尾さんの解説を聞きながら、レスラーそれぞれのキャラクターが絡み合い、ストーリーが紡がれ、試合に至るのがプロレスだと知った。小説に似ているなと思った。それから時々誘われては観戦に行き、次第に好きなレスラーを見つけ、ストーリーを想像するようになり、気がついた時にはどっぷりプロレスにはまっていた。

## 低迷の時代を乗り越え、プロレス本も活況！

三田佐代子さんも１９９６年にプロレス専門ＣＳチャンネルのキャスターにされた時、〈ジャイアント馬場とアントニオ猪木が別の団体にいる、ということすら知らず、全くプロレスを見たこともなければ興味もなかった〉（『プロレスという生き方』より）という。あらゆる書籍や雑誌を読み、とにかく試合を見て、プロレスを詰め込んだ。取材した大会は２０００をくだらないという。

　三田さんが取材をしてきた２０年間は、プロレス界にとって激動の時代だった。この本の冒頭に、１９９７年「ＰＲＩＤＥ」での高田延彦敗北にショックを受けるプロレスファンの様子が書かれているが、格闘技の隆盛に押される形で２０００年代に業界は低迷。しかし近年人気が復活し、プロレスは再びブームになった。私が見始めた１２年から比べても、格段に観客が増え、超満員の会場もめずらしくない。

そして書店の店頭でも、プロレス関連本が増えたなと感じる。その先駆けとなったのが、１４年刊行の『棚橋弘至はなぜ新日本プロレスを変えることができたのか』（飛鳥新社）。新日本プロレスの〈１００年に１人の逸材〉棚橋弘至選手が、プロレスの復活について書き、ビジネス書としても読める一冊だ。この本の成功を受けて、インタビュー本や写真集などレスラーの本が立て続けに出版された。

　また、お笑い芸人・プチ鹿島さんの『教養としてのプロレス』（双葉社）が売れたときには、プロレスというジャンルに興味がある人が多いのだなと感じた。

「プロレス少女伝説」を収めた『井田真木子著作撰集』（里山社）や、『真説・長州力』（集英社インターナショナル）といったノンフィクションも評判となった。ちなみにこの２冊は、私にとってのキング・オブ・プロレス本だ。レスラーの声が切実に迫ってくるのだ。

　プロレス女子＝「プ女子」というキーワードも、最近メディアでよく取り上げられる。お気に入りの選手のＴシャツを着て、一眼レフを構える女性が、いま会場にはあふれている。その姿には、かつてプロレスファンが抱えていた「格闘技アレルギー」はも感じられない。ただ純粋に、リングの上で繰り広げられる人間離れした技を見たい、あるいは個性豊かな生身の人間が体現するドラマを目撃したいという思いで、会場に足を運んでいるのではないだろうか。

　そういった新しいファン、そしてこれからプロレスを見る人たちに向けて、三田さんは『プロレスという生き方』を書いたという。「どうやったら面白く読んでもらえるかを考えた時、人物に焦点をおけば、その中で誰か一人くらい興味を持ってもらえるんじゃないかと思った」とトークショーでは語ってくれた。

## プロレスラーの言葉はなぜ強いのか？

中邑真輔、棚橋弘至、飯伏幸太、里村明衣子といったスター選手から、レフェリー、団体の社長まで、プロレスに携わる１０人に焦点があてられる。団体の規模も違えば、役割も、考えていることも違う。けれど、プロレスを愛し、広めようとして、自分の使命を見据えているという点は共通している。

　「できるだけプロレスをたくさんの人に見てもらいたいんですよ。路上プロレスはそのきっかけになるし、僕のプロレスはたぶん初めてプロレスを見る人にも向いている」（飯伏幸太）

　「自分にはやるべきことやるべき場所があるので」　（ＮＯＡＨレスラー兼副社長・丸藤正道）

　「今いるみんなが、今、いい思いをするためにみんなで努力していかなければならない」（我闘雲舞代表・さくらえみ）

　プロレスラーには言葉を持っている人が多い。日々ストーリーの中で闘い、一方で現実とのをも感じている。格闘の中から生まれた言葉は重く、いつまでも心に残る。たとえプロレスを知らない人が読んでも、組織論や人生論として胸を打つ言葉がたくさんあるはずだ。

## 私が考える「プロレスがいちばんスゲエ」理由

　私が印象に残ったのは、今年初めに新日本プロレスから、世界最大のプロレス団体・ＷＷＥに移籍した中邑真輔選手の言葉だ。「生身の人間が命をかけて戦っているということじゃないでしょうかね」。これこそプロレスの魅力の根本を示している。

　リングに身ひとつで上がり、生命の躍動のようなドロップキックを見せたかと思えば、関節技にし、ブレーンバスターで何度もリングにきつけられる。苦しくても、相手の技を引き出して受けきって、そこから立ち上がる様を観客にさらす。たとえ勝ってもそれで終わりではなく、試合後のマイクで次のストーリーを語り始めなければならない。

　生身の人間が、命と感情のすべてをさらけ出し、ドラマの中に入っていくエンターテインメントがほかにあるだろうか。中邑選手はかつてこんなことを言った。「いちばんスゲエのはプロレスなんだよ！」。野蛮な殴り合いだと思っているのだったらもったいない。プロレスにはあらゆる表現の可能性があるから、私は今日もプロレスを見る。

　ふたたびトークショーのタイトルに戻る。「プロレスはなぜまた面白くなったのか」──三田さんは「結局は人がやっていることだから」と言った。プロレスは表現するものと考えたレスラーたちが、おのおののやり方を模索しているからではないだろうか。ある人は強さを、ある人は愛を、笑いを、美しさを。そして、それぞれの表現、あるいは人生がリングの上でぶつかると、化学反応が起き、その瞬間瞬間しか存在しない表現に変わるのだ。そこには予想もしない光景が待っている。だから、プロレスは面白い。